

● 日本SFの軌跡

宇宙塵傑作選

II

柴野拓美／編



出版芸術社

宇宙塵傑作選 II

宇宙塵傑作選Ⅱ 日本SFの軌跡

発行日 平成九年十二月二十日 第一刷

編者 柴野拓美

発行者 原田 裕

発行所 株式会社 出版芸術社

東京都文京区音羽一―一〇―四 池田ビル
郵便番号 一―二

電話 〇三―三九四四―六二五〇

FAX 〇三―三九四四―七四六〇

振替 〇〇―一七〇―四―五四六九一七

慶昌堂印刷株式会社

近代美術株式会社

印刷所

製本所 大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は、送料小社負担にてお取替えいたします。
©柴野拓美 一九九七 Printed in Japan

ISBN4-88293-148-6 C0093

宇宙塵傑作選Ⅱ——日本SFの軌跡

待っている	清水義範	5
密航者	吉光 伝	19
ひとり手前の男	上栄二郎	25
消す	豊田有恒	35
押す	塩谷隆志	39
きずな	草川 隆	49
放浪者たち	大多和肅夫	55
もつともな理由	梶尾真治	77
案内人	桂 唯史	81
どこにもいない名優	戸倉正三	105

壁	真城 昭	113
綿花大怪獣・ドテラ	横田順彌	133
死を蒔く女	平井和正	137
空が泣いた日	間羊太郎	151
地には平和を	小松左京	157
終 末	半村 良	191
イ オ	安岡由紀子	199
作品が書けないことのお詫び	広瀬 正	215
消えた男	青山智樹	219
二重ラセンの悪魔	梅原克文	241

装幀

江口まひろ

待っている

清水義範

清水義範（しみず・よしのり）

一九四七年生まれ。大学在学中より同人誌活動を開始。自身が主宰する『スーバー・ノバ』九号に沖慶介名義で発表した「冒険狂時代」が、「宇宙塵」一二九号に転載。これが本誌初登場となった。この作品は『日本SF・原点への招待』にも収録。本編（一五五号）も、もともと同人誌『飛行船』六号に「思い出せ!」という題名で発表されたもの。これも沖慶介名義であり、本誌には清水義範名義での作品発表はない。六九年、「冒険狂時代」が『推理界』に転載され、プロデビュ。本格デビュは、七七年のジュヴィナイル長篇『エスパー少年抹殺作戦』である。その後、『未来史』『ランドルフイ物語』などのジュヴィナイル・シリーズを手がけるが、八六年、パステイシユという新手法を打ち出した『蕎麦ときしめん』で、大きな注目を集める。八八年、『国語入試問題必勝法』で吉川英治文学新人賞受賞。そのほか、歴史改変SF『金鯢の夢』、SF短篇集『黄昏のカーニバル』、パステイシユ短篇集『永遠のジャック&ベティ』など、著書多数。

（牧）

著者のことば

「宇宙塵」に載ることが、SF作家への入り口だったあの時代、憧れ、夢にも見て、実際に載ることになった時は嬉しかったものだ。「宇宙塵」のはたした役割はとて大きい。

これは次のようにして始まった。

場所は内木博士の研究室で、博士が名誉教授ということになっている大学の、構内の片隅にそれはあった。研究室とはいっても、物理学や化学のそれとは違い、深層心理学、そのうちでも夢の研究にたずさわっている内木博士のそれは、ゴタゴタした器具や実験装置が所狭しと並べてあるといったふうではない。唯ひとつ部屋の中央に、物々しい装置にかこまれた簡易ベッドがあることを除けば、その他にはびっしりと文献のつまった本棚が壁を取り巻いているだけで、一見応接間といったたまたままいだ。その部屋の中に、博士自身と、二人の助手が向かいあっていた。

「まさに今、歴史的瞬間に我々はいるんですね。ジェンナーに注射を射たれる寸前の彼の息子が、正當にそれを評価していたとしたら……いえ、そんなちやちなものではありません。僕の今の心境は、何物にもたとえられません。人間の歴史に、今までは全く予想もつかなかった新しい一ページをつけ加えることになるかも知れないのですから」

助手のうちの、若い方の男が、興奮を明瞭に表わしてそう言った。博士は、穏やかだが自信に満ちた笑顔を見せて答えた。

「あれは実は自分の息子ではないんだよ。ジェンナー

のことだが。学校ではそう教えてるようだがあれは嘘なんだ。もつとも、だからよりこの場合と似ているといえる訳だが」

「ああ、そうなんですか。いや、とにかくこの役目に選ばれておくは光栄です」

助手の感激は無理のないことだった。まさに偉大な実験がこれから行なわれようとしていたのだから。博士は口調を僅かに変えて真剣に尋ねた。

「もう一度尋ねるが、家族の了解は得てあるのだね。君が私の実験台になることを家の人は知っていて、承知しているのだね」

「ええ、その点は大丈夫です。詳しい内容は話してありませんが、先生の新しい研究を手伝うことになったと言っております。それだけで何か新しい実験をするのだと分っている筈ですし、うちの者は先生を尊敬していますから名誉なことだと思っているんです」

「それに先生」
ともう一人の、やや年配の方の（といっても内木博士から見れば息子程の年なのだが）助手が口をはさんだ。

「何も心配することはないのではないですか。人体に危険を及ぼすという事でもありませんし、成功したあかつきに世間に公表するのを憚るような種類の実験で

もなく、むしろ大々的に発表するような性質のものでありませんか」

「うん、無論そうなのだが、思惑通りにはたしてうまくいくかどうかだ。完全な研究の完成まではことを慎重に運んだ方がいいと思うのだよ」

実は、これらの会話はどうでもよいことなのだ。ただ、こんな会話の中からふと何かを思い出してくれるかも知れないという希望で書いてみたのだが、それはまず無理だということは分っている。

内木博士が完成しようとしている、今、初めてその実験をしようとしている研究について説明してみよう。それはまさに革命的な内容を持っていた。

内木博士は初め、フロイト流の精神分析学的立場で夢の研究をしていた。しかし、それが若き博士のある時期から方向転化を見せはじめた。すなわち、丁度その頃科学体系としてまとまりつつあった大脳生理、大脳物理、大脳化学などの方へ博士の興味が移行し、やがて大脳との関連においての夢科学という研究を完成させていったのだ。途中で、必要上脳医学・脳外科学をマスターするために多くの時間を取られはしたが、その結果到達した真理は、それをおぎなうて余りあるものだった。つまり博士は、それ以前の精神分析学が、夢はどんな意味を含んでいるか、なぜ夢を見る

か、を研究対象としていたのに対し、脳の中のどこで夢を見るのか、夢を見るというのが大脳のどんな作用によるものか、の研究を始めたのだった。

夢を見る、と口には言うが、実際に彼の網膜に光の像が結ばれているのではないことは言うまでもないことである。正確には、夢を見たとき錯覚する、と言うべきなのだ。更に言えば、その錯覚が目が醒めたあとに覚えていて、というのが夢なのだ。なぜなら夢を見ている最中には、それは夢ではなく現実として錯覚されているのだから。夢が夢となるのはそれが終ってから初めてのことなのである。

博士はその錯覚が大脳のどんな作用によるものかを研究した。同時に新局面を次々と切り開いていく脳医学等と関連しあい、その一分野といった形で博士の研究は進んだ。そして、博士は夢の構造をある程度まで極め尽くし、現在ではその研究のまとめの段階にさしかかってきている。博士の名声は世界的なものであり、一部の専門学者の間では、そろそろノーベル賞を授けられてもいい人だとまで言われている。

以上が一般に知られている内木博士とその偉業のあらましである。フロイトが夢の意味を発見したのに対し、内木博士はその構造を発見したといっている。

だがしかし、今、内木博士はその生涯におけるもう一つの、そしておそらく最大の研究にかかっていた。まだまだ博士は引退した訳ではなかったのだ。

新研究は二つの偉大なことを同時に成しとげようとするものだった。科学の進歩というのは、往々にしてそういう形をとるものである。不毛の時代には何一つ新発見できないのだが、一つある大発見がなされるとそこから二次的に次々と新発見が導かれる。ニュートンやアインシュタインの出たあとの時代の科学界の状況を考えるまでもないことであろう。とにかく、内木博士の新研究は二つのことを同時に達成しようとしていた。そのうちの一つは、夢の透視、とても名付けられるべきもので、ある人物が夢を見ている、その時、その夢の内容を他者が知り得る、というものだった。いいかえれば、他人の夢を覗くことができるようになるのだ。夢の分析のために、夢見た当人のおぼろげな記憶だけをたよりにしていた旧来の精神分析医が知ったら、目を見張る出来事といっていだらう。夢が大腦のどんな作用によるかの研究が、逆に、どんな作用はどんな夢を構成しているのかという方向にむきを変えたことでこの研究は完成した。そう、完成したのだ。まだ世間へは未発表だが、この方は既にほとんど完成していた。脳波の微妙な乱れを正確に解読するコ

ンピューターを導入して、夢の進展と同時にその内容が観察できるというその実験は、今この内木博士の部屋にいる二人の助手の協力で、既に何度も試みられていたのだ。夢の透視器とも名付けられる装置が、ほぼ完全な形で既にでき上っていた。過去の実験から、その透視装置は二人の助手が見る夢の透視において、醒めたあと助手の語る夢の内容と九十九パーセント狂いのない正確さで、その細部まで分析できる能力のあることがあきらかになっていた。

夢のプライバシーさえ失われる時代が来てしまう。自分だけが見られる筈の自分の夢が、他人に盗視されてしまう。そんな危惧も考えればきりがなかったが、博士は単に学問的興味からその研究を進めていた。何ごとによらず、新たに発見された事実や、新たに発明された装置には、そういう危惧がつきものなのだ。それを考えるのは、思索者や道德家、法律家などの仕事で、科学者はただ見つけ出し、造り出すのが使命なのだ、内木博士は考えていた。

さて、もう一つの偉業とはそれよりはるかに驚くべき内容を有していた。それは当然のことながら、第一の研究を押し進めていくうちにその補次的成果として出現した分野だったが、分りやすくいえば人工夢というものを造り出すものだった。人工夢、何と

不思議な言葉だろう。しかしまさにその名の通り、内木博士は人工の夢、思いのままにストーリーイを作れる人工の夢を見られるようにしようとしているのだった。

夢が脳のどんな作用かを知り得た今、逆に人工的に大脳の中へ夢を見る原因となる刺激を加えれば、人工的な夢が見られる筈だった。それどころか、脳作用と夢の細かな内容との関係が夢透視器で明らかになっているのだから、コントロールによつて思いのままのストーリーイの夢を見ることも可能となった。いや、それをこれから博士は実験しようとしているのだった。

「もう一時実験手順の説明をしておこう」

と内木博士は二人の助手に言った。そして、一本の注射器を手にした。

「この薬で君は眠りにつく。無論大脳が全面的に眠つてしまわないように適当な濃度に調整してある。いや、大脳が全面的に眠るということはないな。そしてら死んでしまふ。とにかく、夢を見る程度に浅く眠るのだ。そして、君をあつてのベッドに寝かせ、こちらから夢見始めの刺激を加える。君たちも知つての通り、色々考えた末に合成されたストーリーイは、『人間の一生』とでも題されるもので、ごく幼ない時から死ぬまでの数十年を君はこれから夢見ることになる」

そこで若い方の助手が、緊張のおももちをかくしおせぬぎこちない仕草で固苦しくうなずいた。

「こういう内容の夢を選んだのは、それによつて人工夢の可能性を試すためだ。人間の一生には様々な、およそありとあらゆることがおこる。それをどの程度まで精密に夢見ることが出来るかを確かめるのが目的なのだ。

ところで、夢はおそらく人工と自然の混つたものになるだろう。つまり、ストーリーイの概要はこちらでセツトした刺激によつて作られるが、それだけでは夢として完全ではない。ところが、それによつて誘発された大脳の自然の活動によつて、その細部は補われるだろう。そこがこの実験の一つの重大なポイントなのだが、そのところが思惑通りうまくいけば、夢は完璧なものとなる。醒めた理性で大筋をコントロールされながらの夢という未だかつて人の見たことのない夢、本当の夢と違つてもつとずっと合理的な明瞭な夢が誕生するかどうかのポイントはどこにあるのだ」

「おそらくそれはうまくいくでしょう。人間の脳には受け入れがたい不合理をうまく錯覚でとりつくろつというあの作用がありますから」

若くない方の助手がそう言った。

「うん、そこはうまくいくだろうと私も思う。さて、

そうして君は夢を見るのだが、たぶん数十年にわたる生涯の夢を、数時間で見ることになるだろう。夢とは元来そういうもののなのだ。一方、私たちは透視装置で、君の夢を逆探知していく。実験の成功か否かは、だからすぐ分る。ところで、この実験にはもう一つの大切なポイントがあるのだが」

「夢を見ながら、これは夢だと知っていることですね」

若い助手が答えた。

「そうだ。それが大切なのだ。夢がどんなにうまくできていても君は同時にこれは夢だと知っていなければならぬ。いや勿論、人工夢のもとになる刺激の方に、ちゃんとそうセツトしてあるのだが、とにかく、その点が肝心なのだ。なぜならばこれは、小説や映画にとって代るものだからだ」

「僕が先生の御見識に最も感心するのは、そういう点なんです。先生はこれがかかわる問題なのかを、最初からちゃんと見抜いていらつしやる。初めてそのことをきいた時、僕にはなぜこんなことが重要なのか思いつきもしませんでしたからね」

「なあと当り前のことだよ。小説がどんなに現実的に書いてあっても、読む者はそれが小説であることを知っている。どんな名作に引き込まれていても、頭の片

隅では小説だということが分っている。だからこそ人間は正常に小説を読み終えることができるのだ。映画にしても同じことだ。そうでなければ現実に対応できぬ人間ばかりになってしまう。現実と、それよりもはるかに面白い物語りの世界とを混同しては、健全な社会生活は営めないからだ。夢にしても、その迫真力は、小説や映画以上のものであるだけに、それをちゃんと知っていないと大変なことになる。それがうまくいってこそ、世間に安全な新しい娯楽として、あるいは新しい芸術として、これを公表することができるのだよ」

若くない方の助手は、この研究が世間に公表されたあとの時代のありさまを想像していた。彼の脳裏に、そのもようはまぎまぎと浮んでいた。夢のストーリーリイを作る作家が出るだろう。そして、名作はコピーされて市販されることになろう。小説や映画は姿を消してしまうかも知れない。本屋や映画館に代って、カセットの人工夢を売る『ドリーム・ストア』が登場する可能性は十分あるのだ。まるで夢のように楽しく面白い出来事が人工夢で本当に味わえるのだから。そして、映画や小説と違ってこの人工夢では、まさに自分が主人公として立ち廻れるのだから。小説では読者はあくまで読者でしかない、そこがつまらない。

可能性は物語りとしてだけではない。美術的や音楽的にも、これは世界を変えるかも知れない。今まで誰も見たことのない色や聴いたことのない音の世界が、夢という錯覚の中に開けるかも知れない。医学にも応用ができる。暗示による精神病治療にも絶大な効果を見せるだろうし、フラストレーションから人間を解放することも予想できる。

当然、密造の悪質なボルノグラフイー夢とか、ブライバシー侵害夢とかが出廻ることも予想される。アリバイ工作や、暗示殺人等で、犯罪にも応用できるかも知れない。だがそれは別の問題だ。とにかくこれが完成すれば芸術と娯楽の分野に、さらに医学その他の面に、画期的な時代が来るのはまちがいないかった。

「夢が終ると同時に君は眠りから醒める。一つの人工夢を見終って満足感がある筈なのだが……。さて、確認はそれくらいにして、用意はいいかね」

「はい」

こうして、これは始まった。

これから先は初めて知ることばかりだろう。だが、今までの話はどこかで聞いたことのあるものではなかっただろうか。こういうことを今まで一度も考えたことはなかっただろうか。

いや、やはりそれよりも、話を進めよう。それから

その実験が行なわれどうなったか。成功したのか失敗したのか。

実験はほとんどの部分で完璧に近い成功をおさめた。ただ一つの点を除いては。だがその一つの点こそ最高に重大だったのだ。

博士の言った第一のポイントはうまくいった。はっきり言って、うまくいきすぎたのだ。そのため第二のポイントが、予定された通りには成功しなかった。初めのポイントがうまくいきすぎて夢があまりにも現実的だったため、眠っている助手は、完全にその人工夢に巻き込まれてしまったのだ。これは夢だ、などという醒めた判断は全然なかったのだ。

起きている方の助手は透視装置のグラフから彼の夢の内容を知り、この失敗を悟って残念そうに言った。

「夢だと気付いていませんね。その他の点は文句なしなんです。ほぼ物心ついた時から夢は始まって、もう小学校へ入学しましたよ。残念だなあ、すばらしく迫真の夢なのに。いや、それだからこそ夢だなんて思ってもよらないのだろうなあ」

言い終ってふと内木博士の顔を見て、助手は博士があまりにも真剣な顔をしているのに驚いた。その表情からは苦悩がはつきり見てとれた。

「どうかなさったのですか、御気分でも……」

「いや、そんなことではない。君、これはえらいことになってしまったかも知れないのだ。万一にもそんなことにはなるまいと確信していたのだが、誤算だ、完全なる誤算だ。ねえ君、最悪の事態になってしまった。我々は大変なことをしてしまったのだよ。九分九厘うまくいくだろうとたかをくくっていたのが、みごとに外れてしまったのだ。とりかえしのつかないことをしてしまったかも知れないのだ」

博士の口調には痛々しい程の真剣さがあふれていた。

「どうなさったのです先生。実験を中止しましょうか」

「いかん、それはできない。そんなことをしたら彼はどうなってしまうか分らん」

助手は博士の激しい口調に何か訳の分らぬ不安を覚えた。内木博士ほどの人物が何かしらこうまで真剣になっている。その事実が彼の全身を引きしめた。

「どういことですかそれは」

博士は説明した。

「完全に私の誤算だ。すべて私の責任だ。だが、今となっては、打つべき最善の手だてを考えねばならない。そのためにも説明しよう。私が微かに不安を感じていたことのその内容を。……いいかね。こんなにう

まく脳が自分で働き出して、これ程夢らしくない迫力のある夢ができてしまった。この夢の現実らしさは私の予想をはるかに上回っている。もはやこれは夢というようなおぼろなものではない。彼の脳はある意味でフル回転しているのだ。見たり、聞いたり、思考したり、さわったり、すべて目醒めている時と同じく作用している。ただそれが錯覚だということが現実と違うだけなのだ。君たちに前もってこのことを説明しておかなかったのは私の間違いだ。た。とんでもない高慢だった。心の中には微かな不安があつたのだが、絶対うまくいくという愚かな自信のため、君たちには言わないでおいたのだ。余計な心配をしなくても、などと考えていたのだ。それはこういうことなのだ。このままいくと、彼は夢が終ると共に死ぬかも知れない」

「えつ、それは……」

「考えてみたまえ。彼の脳は今夢見ている。そして、夢のあまりの本当らしさのため夢だなどとは思ひもせず、彼はその中で生きている。そして成長している。こうしているうちにも彼の夢は現実そっくりに進行している。彼は完全に錯覚しきっているのだ。そして、夢の中で彼の人生が終る時、つまり夢の中の彼が年を取ってついに死ぬ時、この夢は終る。脳が完全に騙されてる。いいかね、考えたまえ、その時、脳は錯覚

したまま、本当に活動を停止してしまうかも知れないのだ。いやこの様子では、十中八九そうなるってしまっ
「苦なのだ」

助手は呆然として、幾度もうなづいた。彼にはすべ
てのみ込める話だった。戦死した人間のうちのかなり
の者は、敵の弾が当たったとたん、死んだ！と思つた
ことによるショック死だということを彼は知つてい
た。完全に騙された脳が、死の時をむかえたと思ひ込
んで本当に死んでしまう。それはありうることなのだ
つた。

「実験を中止することはできないのですか。彼の夢が
終ってしまう前に」

「いや、それもこの状態では危険なのだ。危険すぎる
のだ。そんなことをしたら彼はどうなってしまうかも
知れん。発狂するか、ショック死するか。そうだと
う、考えてもみたまえ。彼は本当だと思ひ込んで、
我々が日常見るあのぼんやりした夢とは較べものにな
らない現実的な夢の中に生きている。突然、何の前ぶ
れもなくそれが終る。それはものすごいショックの筈
なのだ。我々が映画を見ている時に、突然停電にな
ってストーリーがと切れる。それだけでもその瞬間、
我々は熱中していた楽しみを中断させられて、何とな
くいやな気がする。フラストレーションがおこる。い

いかね、映画でさえそうなのだよ。これは作り話で、
自分は金を払って座席の一つに坐り、それを見ている
だけなのだということを、あんなにはつきり自覚して
いる映画ですら、つい内容に我を忘れていれば、あの
軽い不満を感じてしまうのだ。だがこれは映画ではな
い。彼は錯覚しきっており、夢の中の世界に生きてい
るのだ。突然の中断が信じられない程の不安、不満を
生むことは目に見えている。そのフラストレーショ
ン、その恐慌に、彼の脳と神経がたえ切れるかどうか
が問題なのだ。そんな不安を持った人間は、未だかつ
てこの世に存在したことがない。そして私の予想で
は、人はそのようなことに出会えば、ほとんど確実に
発狂する。もつとずつと小さなショックで発狂した例
を、私は無数に知っているのだ」

助手の顔も今や真剣そのものだった。博士はなおも
話を続けた。

「すべては私の責任なのだ。考えない訳ではなかった
のだが、人工夢の刺激にはちゃんと、これは夢だとい
う暗示を含めてある、それだけでうまくいくと思ひ込
んでいた。だから君たちにも言わなかったのだ。しか
し、人工夢があまりにも完璧すぎた。人工の刺激を、
脳が自分でこうまで巧みにあやつって、夢と思うには
こんなにも本当らしい夢をつくってしまうとは、予想